

ヨーロッパ都市の旧市街への価値づけ

——建築・都市計画をめぐる思想史的考察——（その2）**

笹野益生

V おわりに

本章では、各著作に表れた著者の思想を辿りながら、ヨーロッパ都市の旧市街に対する価値づけや評価の態度が20世紀を通じていかに変遷してきたのかについて若干の考察を加えつつ論じてみたい。

IIの20世紀初頭における近代都市計画思想に位置づけた著作のうち、『進化する都市』においてパトリック・ゲデスがとりわけ深刻な問題として捉えていたのは、都市の「スラム」化がもたらした自然との接点の喪失であった。この状況を克服するため、ゲデスは、エベネザー・ハワード（1850-1928）が構想した「田園都市」のコンセプトを、既存の都市である旧市街に適用しようと考えた。

また、ゲデスは、大聖堂のような個々の歴史的建造物には価値を認めつつ、その周囲の街路や家屋は、大聖堂を四方から眺めるために取り壊すことが適切だとする当時の一般的な考え方を共有していた。この考え方は、IVにおいて取り上げた陣内秀信の『イタリア都市再生の論理』で言及されていた「モニュメント保存」に通じる。

しかし、ゲデスが過密化や賃労働を背景とする衛生状態の悪化や貧困、スラムの発生をきわめて深刻に捉えていたことを踏まえれば、たとえ彼が歴史的建造物に価値を認めていたにせよ、その背後に、不良地区を取り壊すための「文化的言訳」としての側面がなかったとは言い切れないのではないだろうか。

むしろ、1910年代においては、衛生状態の悪化や貧困、スラムといった19世紀的な都市問題への対処に追われる状況が続いていた。ゲデスには、過去か

ら受け継がれた街並みに好感を示す態度もみられたが、深刻な都市問題の原因となっていたような古い都市組織の撤去はやむを得ず、そこに価値を認める余地はなかったのである。

近代都市計画思想に関する著作に位置づけたもう一冊、ル・コルビュジエの『ユルバニスム』は、ゲデスの『進化する都市』の10年後に刊行された。

折れ曲がった街路網を特徴とする旧市街の都市組織に対する否定的態度という点において、ル・コルビュジエには、ゲデスに通じるものがあった。しかし、ル・コルビュジエは、直線の道と曲線の道という極端に単純化したモデルを用いて、曲線の「ろぼの道」が刻まれた都市、つまり旧市街を不幸な存在として切り捨てるにいたったのである。

たしかに「ろぼの道」のような道路網は、都市規模が大きくなるほど、より深刻な状況をもたらすであろう。ル・コルビュジエは、パリ中心部の「ろぼの道」は、自動車交通にとっての障害でしかなく、いったん取り壊して白紙に戻し、再開発するべきだと考えていた。歴史都市というパリのもう一つの横顔について、ル・コルビュジエはどのように考えていたのであろうか。

直線という道路形態は、目的を伴う人間の移動や自動車交通といったごく単純化された機能から導かれたものであった。ル・コルビュジエは、都市計画においても機能主義者であった。さらに、空間は直角を原理とするべきであるとの主張の背景には、機能を伴わない形態の余地を認めない合理主義的な思考があるように思われる。

そのようなル・コルビュジエにとって、歴史都市の折れ曲がった街路網は、「無秩序な街路の堆積」にしか映らなかった。一見無秩序ではあるが、過去から受け継がれた街路組織がもつ現実や意味について想像されることはなく、これを直線と直角の幾何学という理念で塗り替えることに躊躇しなかったのである。

ル・コルビュジエの思想は、ゴシック様式の大聖堂の形態に対する評価にも端的に示される。大聖堂の尖塔は無価値であるどころか、苦痛さえもたらすというのがモダニズムの感覚とするならば、それは、19世紀のロマン主義やわずか10年前のゲデスの感覚からも、また、1960年代のロッシや現代の感覚か

らも孤立した感覚ではないだろうか。

第二次世界大戦後、機能主義にもとづく都市計画の弊害が明らかになると、機能主義に対する批判が現われる。IIIで取り上げた旧市街の物質的価値に関する著作のうち、アルド・ロッシの『都市の建築』もそのような一冊であった。

ロッシが概念として提示した「都市的創成物」の典型はモニュメントであり、その形態的価値は場所や時間の中で複雑化・再編成されるため、最近建てられたばかりの建築は同様の価値を持ち得ないと述べる。つまり、ロッシの思想は、過去から受け継がれたモニュメントが凝集する旧市街の価値づけに直結するものである。

とくに、都市的創成物が場所において複雑化・再編成されたという点に着目してみたい。それには、モニュメントの大半が長期の使用に耐えうる石造建築であることに加え、市壁という物的制限によって建造環境が稠密化せざるを得ないという囲郭都市に固有の条件が大きく寄与したのではないだろうか。

「場」に対するロッシの関心も、今村（2013：142）が指摘するように、場所に対するモダニズムの無関心への批判として受け止めることができるだろう。さらに、「ファサード保存」への痛烈な批判や、極端な事例としての「都市の博物館化」に対する肯定的態度は、同時期にイタリアで展開された保存再生理論に合致するものであった。

ロッシは、時間によってつくられたとも言える都市的創成物の形態的価値を認めはした。しかし、それは、ある特別な時間的断面で切り取った形態に特別に価値を認めるという態度ではなく、したがって、変化しつづける形態を否定したわけでもなかった。

むしろロッシは、都市的創成物を都市の成長を支える生命体のように捉えた。「場」や集団的記憶と結びついた都市的創成物が成長または進化するのに連動し、都市の形態もまた変化していく。この考え方は、オスマンの「パリ改造」に対する肯定的評価にも繋がっているように思われる。

同じく旧市街の物質的価値に関する著作として位置づけた『街並みの美学』および『続・街並みの美学』において、芦原義信が考察の対象としたのは、建築と空間との関係によって成立する街並みである。ヨーロッパの風土・文化や

ゲシュタルト心理学の「図」と「地」の関係を、日本との比較の視点を交えて分析した結果、浮かび上がってきたのは、ヨーロッパの街並みを支える「壁の建築」であり、連続的な外壁面がつくり出す空間的特質であった。

街路・広場などの空間が、建物と同質の「図」となることで、屋内と屋外が密接に連なる。D/Hが1より小さいことも、街路や広場が「図」となるうえで重要な要素であろう。その結果、街路の幅が狭く、相対的に沿道の建物の高さが高くなり、壁で囲まれたような閉鎖的な街路空間が生み出される。

このような建物の存在によって成り立ち、かつ、それによって建物と密接に連なる空間やその特質は、たとえヨーロッパにおいても、近代以降に計画的に形成された街並みには認められず、旧市街の街並みが有する特質である点が重要である。その理由は、前近代において、増大する人口や都市の活力を囲郭都市という物的制約のある空間で吸収するとしたら、建造環境を稠密化するか、垂直方向に延ばさざるを得なかったことにもあるだろう。

私たちがヨーロッパ都市の旧市街の街路や広場などの空間に、今までに味わったことのない感覚や魅力を抱いたとしたら、その理由の物質的背景については、本書が説明してくれるのではないだろうか。近代都市では味わえない空間の魅力は、その物質的価値にも繋がるはずである。

芦原の研究にも示唆を与えたのが、IVの旧市街の社会的価値で取り上げたバーナード・ルドフスキーの『人間のための街路』である。ルドフスキーは、移住先のアメリカで、街路が単に移動手段でしかないという状況に遭遇した。この経歴ゆえに、ルドフスキーは、イタリアをはじめとするヨーロッパ都市の街路が、多様な使い方に対応する空間であることを鮮やかに描き出す。

移動以外の最も基本的な街路の使い方は、町を自由に歩き回る遊歩や、日常的な習慣行為としての散歩であろう。ルドフスキーは、ハンナ・アーレントの描写を引用して、目標や目的のない遊歩者がパリの街路にもたらず活気を伝える。遊歩を支えるのは、沿道にある無数のカフェの存在である。

街路の活性化に寄与するカフェやレストランは、建物があってこそその街路というルドフスキーの考え方を示す好例である。このような飲食店のテラス席が街路に張り出せば、そこは、店内の雰囲気や漂う空間へと転じ、歩行者も足を

止めやすくなるのではないだろうか。

いわゆる迷宮都市に対するルドフスキーの観察も興味深い。細い街路が頻繁に折れ曲がり、複雑に入り組み、袋小路で行き止まる街路網は、自動車を寄せ付けないという条件も重なることで、歩行者に屋内の廊下を歩いているような空間体験を抱かせると言う。歩行中、視界が絶えず変化することも、刺激的で楽しい体験になるだろう。

ルドフスキーが取り上げる事例の多くも、ヨーロッパ都市の旧市街にみられる歴史的な街路空間である。そのような空間の物的特質を、芦原は建築家の視点で探り出そうとしたのに対し、芦原にも影響を与えたルドフスキーは、そのような特質をもつ街路空間が、人びとによっていかに生きられ、使いこなされているのかという社会的価値に注目したと言える。

同じく旧市街の社会的価値に関する著作として位置づけた『イタリア都市再生の論理』において、陣内秀信は、歴史都市に対する価値づけの視点が、文化財的価値から社会的価値へと推移する過程に着目した。それによると、第一期（1800年代後半～1940年）から第三期（1965～1970年）までの各期において、旧市街は危機的な状況に陥り、とくに第二期と第四期に大きな論理的展開があったことがわかる。

第二期（1940～1965年）では、第一期から引き続き行われていた「モニュメント保存」が否定され、保存の対象としての文化財の考え方が、モニュメントからモニュメント周辺の地区、さらには歴史地区全体へと拡大された。ただし、文化財としての価値づけの視点にもとづき歴史地区を保存するという考え方に変わりはなく、旧市街に物質的な価値を認めて保存する考え方が維持された。

第四期（1970年代）では、第三期の「ファサード保存」がもたらす弊害を防ぐため、歴史的につくられた生活環境と社会組織に価値を認めて保存するという考え方にシフトした。とくにヴェネツィアでは、都市は博物館であってはならないとの考え方が確立された。こうして1970年代に、旧市街における価値づけの視点は物質的価値から社会的価値へ、物質的価値を担ってきたモニュメントや歴史地区は保存の対象から再利用の対象へ、それぞれ質的な転換がな

されたと言えるだろう。

以上の議論を踏まえ、旧市街の価値づけの態度の変遷について概観して本稿を閉じることにしたい。

ゲデスの考え方に示されていたように、1910年代においては、文化財的価値にもとづく歴史的建造物の保存や、都市の衛生状態や貧困の改善を目指そうとする都市計画など、19世紀の建築・都市計画思想が踏襲されていた。選ばれた歴史的建造物にのみ文化財的価値を認めるモニュメント保存が主流であり、周囲の都市組織や旧市街全体に価値を認めようとする考え方にはいたらなかった。

続く1920年代は、折れ曲がった街路網によって特徴づけられる既存の都市組織が、機能主義のエージェントのごとき建築家、ル・コルビュジエによって全否定される。自動車という新しい要件と相容れない都市組織は無価値であるどころか、弊害でしかないという極端な考え方は、少なくとも都市計画思想史の上では、旧市街にとって最大の受難を意味したと言えるであろう。

第二次世界大戦後、機能主義の限界が明白となる1960年代以降、既存の街並みの形態や景観を見直し、その価値づけに繋がるような考え方が現れた。ロッシの「都市的創成物」と芦原の「街並み」は、いずれも建築と都市の関係に着目し、両者を取り結ぶ概念であったと言える。それと同時に、価値づけの対象を単体の建物から旧市街全体へと広げ、歴史地区として保存する考え方も同期していたと言えるのではないだろうか。

1970年代に旧市街の価値づけの視点が物質的価値から社会的価値に転じたとしたら、ルドフスキーは、そのような変化に対応するかのよう、ヨーロッパの歴史都市を、人びとが集い、ともに生きるための魅力的な空間として描き出した。そのうえで、陣内が明らかにしたのは、旧市街に社会的価値を認め、人びとの生活環境として維持するには、歴史的建造物や歴史地区の価値づけの視点を、保存から再利用へと転換することが必須であったということである。

注

** 本稿は、前号掲載のその1（I～IV章）に本号掲載のその2（V章）を合わせるこ

とによって初めて一貫した論となるが、出版上の事情により分割掲載とせざるをえなかった。読者には不便を強いるが、必ずその1を併せて参照されたい。

資料

1. ゲデス, パトリック (西村一朗訳) (2015) : 『進化する都市—都市計画運動と市政学への入門』 鹿島出版会, 391頁. (初版) 1968年. (原著 : Geddes, Patrick (1915): *Cities in evolution: an introduction to the town planning movement and to the study of civics*. London: Williams & Norgate.)
2. ル・コルビュジエ (樋口清訳) (1967) : 『ユルバニスム (SD選書 15)』 鹿島出版会, 291頁. (原著 : Le Corbusier (1925): *Urbanisme*. Paris: G. Crès.)
3. ロッシ, アルド (大島哲蔵・福田晴虔訳) (1991) : 『都市の建築』 大龍堂書店, vi + 432頁. (原著 : Rossi, Aldo (1966): *L'architettura della città*. Padova: Marsilio.)
4. 芦原義信 (2001) : 『街並みの美学 (岩波現代文庫 (学術 49))』 岩波書店, v + 301 + 13頁. (初版) 1979年.
5. 芦原義信 (2001) : 『続・街並みの美学 (岩波現代文庫 (学術 53))』 岩波書店, v + 299 + 8頁. (初版) 1983年.
6. ルドフスキー, バーナード (平良敬一・岡野一字訳) (1973) : 『人間のための街路』 鹿島出版会, 342頁. (原著 : Rudofsky, Bernard (1969): *Streets for people: a primer for Americans*. New York: Doubleday.)
7. 陣内秀信 (1978) : 『イタリア都市再生の論理 (SD選書 147)』 鹿島出版会, 248頁.

文献

今村創平 (2013) : 『現代都市理論講義』 オーム社, 285頁.

Valoración del casco antiguo en ciudades europeas: desde la perspectiva de la historia del pensamiento en arquitectura y urbanismo

Masuo SASANO

En la década de 1910, como mostró la idea de Geddes, se siguieron las ideas arquitectónicas y urbanísticas del siglo XIX, como la conservación de los edificios históricos en función de su valor de propiedad cultural, y la planificación urbana dirigida a mejorar las condiciones higiénicas y la pobreza de las ciudades. Lo que se practicaba era la llamada conservación de monumentos, y no había nacido la idea de poner en valor el tejido urbano en torno a los monumentos y todo el casco antiguo.

En la siguiente década de 1920, el funcionalismo propuesto por un arquitecto del siglo XIX, impulsado por la nueva exigencia del tráfico de automóviles, dio como resultado las ideas urbanísticas de Le Corbusier. Lejos de carecer de valor, el tejido urbano existente, incompatible con las nuevas funciones, llevan a la idea extrema de que no es más que un obstáculo.

Después de la Segunda Guerra Mundial, en la década de 1960, cuando los límites del funcionalismo se hicieron evidentes, surgió la idea de centrarse en la forma de la arquitectura y la ciudad, alejándose de la función. Rossi utilizó el concepto de los “hechos urbanos” para reconocer el valor de la sostenibilidad de las “formas” que se han creado durante un largo período de tiempo en un entorno urbano. Tanto los “hechos urbanos” de Rossi como los “paisaje urbano” de Ashihara, que valoró desde una perspectiva japonesa, tienen algo en común en que se sitúan entre la arquitectura y la ciudad, y las conectan. Se puede decir que las dos ideas estaban ligadas al movimiento de ampliar el objeto de valoración de un edificio aislado a todo el casco antiguo.

En la década de 1970, el punto de vista de la valoración de las ciudades antiguas pasó del valor físico al valor social. Como para responder a este cambio, Rudofsky describió las ciudades históricas de Europa como espacios atractivos para que las personas se reúnan y convivan. Además, Jinnai aclaró que era esencial cambiar la perspectiva de valoración de edificios históricos y distritos históricos de la conservación a la reutilización, para reconocer el valor social del casco antiguo y mantenerlo como un entorno de vida para los habitantes.